令和７年度　日本大学スポーツ科学部　個人研究費　研究実績報告書

所属：スポーツ科学部　競技スポーツ学科
資格：教　授
氏名：益　子　俊　志

研究課題名	スポーツの歴史・文化からみた組織論の研究 -スポーツからみえるチームワークとリーダーシップ・フォロワーシップとは何か、スポーツの意義とは何か-
研究目的及び研究概要	（１）研究の背景 ラグビーに限らず、その競技の歴史や文化を知ることで、その競技の根源・本質即ちなぜその競技が発展普及したか、どのような理由で愛好者がいるのかを探ることが出来る。歴史的・政治的背景も重ねて探求することはあまり関連づけされてこなかった。どのような背景がスポーツの発展に寄与してきたのか解明する。 （２）研究の目的 各競技の根源（何を目的に発展したのか、軍事目的・娯楽。誰がやっていたのか）を探求することで、その目的は何なのか。そこから生まれるスポーツの意義を探る。 （３）研究の計画 スポーツの歴史・文化から見た組織論の研究では、文献検索を中心に識者のヒアリングを行い、武士道・騎士道とは何かフェアプレーの精神とは何か追求し、スポーツを通してリーダーシップとは何か、チームワークとは何かを探求する。また軍隊におけるラグビーの位置づけ価値を探りスポーツのする真意を探る。 令和2年度は、令和元年ラグビーワールドカップ日本大会によってラグビーの認知度が上がり普及にどのような変化をもたらしたのか調査研究する。 令和5年度は、ラグビーのもたらす教育的価値の始まりを探り、スポーツの発展を研究する。英国パブリックスクールの教育体系等現地調査する。
研究実績の概要 研究の進捗状況・得られた成果・今後の課題・研究実績等	平成28年度は資料収集し、英国、米国でのラグビーのあり方について検討した。平成29年度は自衛隊のスポーツの歴史を探るため、現地への資料収集を実施し、他国軍隊と自衛隊または旧軍でのスポーツを比較し、組織論とは何かを追求した。平成30年度は各種競技について歴史・文化の違いを比較し(アメリカンスポーツとブリティッシュスポーツの違いなど)、競技の発展、普及について研究した。令和元年度はスポーツと政治の関係の歴史から、スポーツの持つ力が国際関係に与える影響について研究し、そこから見えるチームワーク・リーダーシップとスポーツの意義を考えた。 令和2年度は、令和元年ラグビーワールドカップ日本大会によってラグビーの認知度が上がり普及にどのような変化をもたらしたのか調査研究した。国内のラグビー人口の底辺拡大への影響を調査した。特に子供たちへの影響は大きい影響を与えたと推察できる。全国のラグビースクールの加入数の倍増など。令和5年度は2023年ラグビーW杯フランス大会を終えて、日本の子供たちに影響があったのか福岡県をを中心に調査を行った。日本国内で開催した2019年大会とは違って影響は少なかった（競技者数は逆に減少傾向にある）。また、日本において大会が盛り上がりをみせた背景（ラグビー文化、スポーツの価値）を探った。令和3年度もラグビー・スポーツの教育的価値の原点を探るため英国パブリックスクールの教育体系またはその歴史を現地調査するつもりであったが、新型コロナ感染拡大の影響で渡英がかなわず現地調査ができなかったが、国内において文献検索等事前に調べられるものは調査し、英国の時代背景や宗教の影響等がスポーツにおける関わりを調べ、令和5年度は現地調査を実施した。英国ラグビー校、オックスフォード大学を訪れ情報収集をした。それをもとにまとめ作業を進めている段階である。著書・文献を中心に研究を進めているが、18世紀中頃にスポーツが急激に発展し各競技団体が設立された。その背景には、英国の産業革命や宗教的な筋肉的キリスト教主義が主流となりスポーツで身体を鍛える男子が増えた。また、教育にスポーツが取り入れられたのもこの頃でパブリックスクール、大学でスポーツが発展した。オックスフォード大学、ケンブリッジ大学が中心となり、その卒業生や英国軍隊が世界にスポーツを拡散していった。具体的に、ラグビーは、アフリカ大陸は商社マンと英国陸軍、豪州・ニュージーランド等のアセアニアは英国海軍が普及拡散した。今後も深掘りしたいと考える。世界的にスポーツの価値が高まる中、国内においてはスポーツ人口が減少の一途を辿っている。令和7年、文科省発表では特にラグビーの高校生の競技人口が激減しておりその対策は急務である。 また、第11回実践スポーツ医科学研究会において発表を行った。題目『大学生ボディビル選手におけるアンチ・ドーピングの知識及び意識に関する調査』